

モンスターペアレントの社会学

Sociology of Helicopter Parent

永井 広克
NAGAI Hirokatsu

はじめに

数年前、筆者は県内の保育士に「保育士の仕事と家庭」というアンケート調査を実施した。働く女性として、仕事と家庭の両立をどのようにして行なっているかを、いくつかの質問を設けて郵送調査をした。その結果、家族形態は三世同居の大家族が多く、自由記述には、義父母が子育てや家事を常に協力してくれるからこそ、仕事が続けることができた、という回答が目立った。加えて、保育士という仕事は、傍からは子ども相手のお遊び程度にしか見られないが、実際はとても大変な仕事であり、子どもの対応よりも、理不尽な要求を掲げる親の対応に苦慮するという回答も散見された。すでにモンスターペアレントが出現し、対処の仕方に悩んでいたのである。

保育園のみならず、小学校や中学校などでもモンスターペアレントに悩まされる教師が増加している。子育ての責任をすっかり保育士に押し付け、何かと文句を付けるのが保育園児のモンスターペアレントだとすれば、小・中学校のそれは教育の責任をすっかり教師に押し付け、自分の子どもに何か気に食わないことがあると、教師の責任だと騒ぐ。

むろん理不尽な要求を掲げて、保育士や教師を困らせるモンスターペアレントは一部の親にすぎないだろう。保育士や教師の仕事の大変さを思いやり、彼らの立場から物事を見よう、という親が圧倒的に多いはずである。でも現代人は大なり小なりモンスターペアレントになる素質を持っている。自己中心的で他人の立場を思いやることなく、自分の権利ばかり主張して、自分の義務を忘れた利己主義的な性格を持っている。保育園の保育士や小・中学校の教師は子どもや自分に対するサービス提供者だという意識が、その利己主義的な性格を強め、時には保育士や教師を自分より社会的な地位が低い人間だと見下し、理不尽な要求を突きつける。

また保育園や小・中学校だけでなく、医院や病院、企業やデパートに対して理不尽な要求を掲げて、責任を追及するクレーマーも増加している。客商売だから昔から何らかの苦情が持ち込まれてきたが、近年はそれが飛躍的に増加し、その苦情の内容や方法が多様化している。そんなクレーマーに対処するために企業やデパートは苦情処理係を設けている。しかし、医院や病院は苦情処理係を設けていない。医者は「先生」として患者より高い地位に立ち、病気を治してくれる偉い存在だったから、受けた治療に文句を言うことは考え

られなかった。保育士も小・中学校の教師もかつては大なり小なり尊敬される存在だった。ところが今では「先生」の権威は落ちて、患者に対するサービス提供者にすぎなくなった。

そこで本稿では、保育園や小・中学校を襲うモンスターペアレントの性格を捉え、彼らが生まれた社会的状況や彼らを取り巻く社会的状況を考察し、加えて彼らに対する対処方向を探りたい。

1. 困った親の4つのタイプ

ほとんどの親は子どもとの関係にことさら問題はなく、学校とも常識的につきあえるが、一部の親があまりにもひどいので学校は混乱し、教師は大きな傷を負わされている。

その困った親には①放任型の親、②支配型の親、③家来型の親、④不平不満型の親の4タイプがある。

- ① 放任型の親は、子どもを放ったらかしている親である。親としての責任を放棄して両方とも愛人を作って帰宅が深夜になったり、リストラされて職探しにも出かけないで、毎日、子どもと家の中で寝ているだけだったりする。子どもの面倒を見たくない、面倒くさいと言って子どもを放任するというよりも放置する。
- ② 支配型の親は、子どもをきちんと教育しよう、正しくしつけようとする姿勢が強すぎる親である。電車の中でキレて子どもを大声で叱りつける母親や、子どもの頃からずっと挫折知らずに生きてきた優等生の母親が、親としても優等生であろうと、子どもにあれこれ口出し、手を出したりする。
- ③ 家来型の親は、子どもの家来になって、何でも子どもの言いなりになってしまう親である。ともかく子どもがかわいくてしようがなく、子どもに嫌われたくないために、つい子どものわがままな要求に従う。子どもに言われるままに何でも買い与えてしまう。
- ④ 不平不満型の親は、最近目立つタイプで、ストレスのはけ口として教師を利用する親である。このタイプの親は子どもの教育に熱心ではなく、クレームだけはつける。

これら4タイプに共通しているのは、きわめて利己的、個人主義的で、自分の子どもの立場からしかものを考えられないことである。クラス全員の子どもの大切にしなければならない教師の立場などを思いやることもない。なかには子どもとの関係をうまく保つためのネタとして、教師の悪口を家で日常的に口にしている親もいる。

こうした個人主義的な価値観を持った困った親の先頭を切ったのは、30代から40代半ばの親である。いわば彼らは松田聖子世代と言える。親の世代を3つに分けると、1978年以前に思春期を過ごした、まじめガンバリズムの世代と、1978年から1992年に思春期を過ごした、自己実現の世代、1993年以降に思春期を過ごした、脱力世代となる。まじめガンバリズムの世代は山口百恵世代とも言え、根性や忍耐が文化の基礎にあって、「男は根性、女は忍耐」という高度経済成長的価値観をまだ持っていた。アニメでは「巨人の星」や「アタックNo.1」といったスポ根もの、ドラマでは山口百恵の「赤いシリーズ」を思春期に見て育った世代である。学校の教師に対しても、教師はえらい人、信頼できる人で、親も子どもの教師に従うべきという気持ちを持っていた。

ところが、1978年になり1ドルが200円を切り、日本が豊かになると、その豊かさを享受しようという雰囲気や、根性や忍耐は時代遅れだという雰囲気が急速に広まった。テレビからスポ根ものが一気に消え、代わって出てきたのは「がきデカ」のようなギャグマンガや「オレたちひょうきん族」やトレンドドラマ、音楽ではユーミン、サザンオールスターズというような根性や忍耐といったものとまったく無縁の、軽やかで都会的で快樂的な気分が広がった。そのような時代の雰囲気に包まれて、困った親の第一世代が思春期を送った。

やがて日本はバブル景気にわき、自己実現の時代に突入する。その象徴的なタレントが松田聖子である。アイドルスターになり、有名歌手との恋愛、有名男優との結婚・出産・離婚、歯科医との再婚・離婚を繰り返しながら、いつまでも若々しくきれいで、エネルギーに生きている。人生をあきらめずに、あれもこれも欲しいものを手に入れてきた。他人にどう言われようと、自分らしい生き方を貫いてきたのである。松田聖子はある意味で、仕事も家庭も、と貪欲な30代、40代の女性の生き方を体現した象徴的な存在である。彼女たちはただ黙って耐える生き方はダサい生き方で、自分の欲求に素直に従って生きることを良しとする。

忍耐と根性を優先した山口百恵世代が人と協調することを大事にするのに対し、自己実現優先の松田聖子世代は、何よりも個人、自分を大事にする。公のものに対し自分を合わせるという感覚がゆるやかで、教師や学校に合わせよう、協力しようとする気持ちよりも、まず「わが子」が一番となる。また自分のことを大切にしたい気持ちが強いので、子どものために自分を犠牲にするという気持ちも薄い。親になってもまず自己実現という囚われから抜け出せない。それで子育てを放棄したり、子どものためのお金を惜しんだりすることになる。

また松田聖子世代は物心がついた頃にはすでにテレビが普及し、生まれたときから豊かな時代を実感して育っている。親から叱られた経験はほとんどなく、女性であっても、家事手伝いよりも、勉強しなさい、と言われて育った人も少なくない。人から自分の欠点を指摘されたり、注意されたりした経験はほとんどないので、そうされるとすぐに傷つく。だからこそ自分の子どもが問題を起して教師から連絡を受けると、それだけでひどく傷ついたり、どうしてうちの子だけ、と逆ギレして、かえって強く反発する。

松田聖子世代のパーソナリティがモンスターの種であるとするれば、それを発芽させる土壌が格差社会である。経済的な格差を背景にして、将来に希望を抱き、努力している人たちと、努力することに意味を見出せない人たちに社会が二極化している。人並みでいたいから、勉強して頑張る、という気持ちが薄れ、どうせオレなんて・・・と言う投げやりな諦めの気持ちが蔓延している。人並み幻想が崩れ、経済的に豊かで学歴を信奉している親が上流を維持しようと、熱心に子どもを教育する一方で、貧しい家庭では「いくら頑張っても報われない。自分たちはどうせ下流なんだから」と希望まで下流化している。

そのため教師や学校に対するクレームも二極化している。一方は「うちの子供をちゃんと見てくれているか」「この評価はおかしい」「うちの子はもっといい学校に進めるはずではないか」という教育熱心ゆえのクレームである。もう一方は、教育への意欲はなく、子育てにも関心はないけれど、ストレス発散のはけ口として学校を利用する「言うだけ言っとけ」的なクレームである。

2. モンスターペアレントの心

モンスター状態になると人はある特徴を身に付ける。彼らは一見、ひたすら高圧的で理不尽だが、彼らなりの理由や背景を持っている。それらは次の5つに分けることができる。

① 社会不安からくる疑心暗鬼

近年、学校や病院に対する不信感が蔓延している。メディアが大げさに報道する教育の荒廃や医療過誤のニュースは、人々を不安な気持ちに駆り立てる。学童期の子どもを持つ親は「自分の子どもに何かあったらどうしよう」と考え、入院患者は「医療ミスにあったらどうしよう」と心配する。校長や医師が、口先だけで「大丈夫」と言ったところで、信用できない。心の奥底には常に「大丈夫か？」という思いがうごめいている。その不安が積み積もった末にモンスター化する。

② コミュニティの貧困化

高度経済成長と共に、家族や地域社会などの共同体は崩壊しつつある。拡大家族は核家族化へ分散し、きょうだいの数が減少し、親族関係も疎遠になった。近所付き合いも希薄化し、かつて存在したコミュニティがしだいに解体されていった。モンスターはこのようなコミュニティの希薄化の中で成長した。コミュニティの解体は、自分と違う価値観や考え方、行動や文化とぶつかり合う経験を欠如させる。モンスターは、自分がいて、他者がいて、社会が成り立つということが実感できない。他者との自然な距離、周囲への配慮、自分の発言がどのように受け止められるのかを考える想像力が欠けている。

③ 急激な訴訟文化の流入

日本には、古来、訴訟を忌み嫌う風土があった。封建時代には、庶民がお上に訴え出ることは命がけの所業だったし、明治以降も、自らの権利を公的な場で主張することは、大それたこと、とされていた。しかし、昨今は、告発者の権利が守られる上に、自分の権利を主張することは良いことになり、訴訟沙汰はごく身近なこととなった。誰しも権利を主張できるのは公平なことだし、正義感を持って告発することは市民の義務でもある。しかし、ややもすれば高慢で声高な要求や主張も生み出している。

④ 感情表現の未熟さ

主張する方法に精通していないことは、日本人は議論下手ということでもある。論理に裏打ちされた主義主張は、まず「自分がどう思い、どう感じているか」を正確に把握できていないと不可能である。論理以前に、感情を言語化する技術を磨いていない。いま自分の心の中にはどんな感情があるのかを、しっかりつかまないうまま主義主張を行なうと、ただの怒号の押し付けになる。

⑤ 格差の中のストレス

決して技術には長けていないのに、行き当たりばつりに感情をぶつける人に、常に鬱積した不満がある。加えて、格差社会の中で、社会に参画できず、貢献もできず、生活は不安で、時間だけがある。自分が社会に望まれていない、という思いをもてあましている。そこで、自分の存在を知らしめたいという承認欲求から、教師に罵声を浴びせたりもする。

3. 教師が狙われる理由

このような社会では、モンスターはいつ、どこに現れても不思議ではないが、出現率が高いのは学校と病院である。その理由は次の4つである。

① 教師や医師は現代の弱者

クレマー対策の行き届いた施設や店舗、害をもたらす者を出入り禁止にできる企業は、モンスターにとって攻めにくいターゲットである。しかし、学校や病院は、どんな子どもでも教育を受ける権利があり、どんな患者でも治療を受ける権利がある、という前提で、学校や病院は門戸を開放する義務を持っている。さらに、どんな子どもにも親身に接すること、子どもの安全を図ること、差別的な発言は言わないこと、気安く不用意な発言はしないこと、教師は私生活も清廉であるべきことなど、多くの規制がある。「教師たるものは無私の心で教育に献身すべきである」という職業倫理に縛られている。つまり社会的な地位が十分持っているはずの教師は、コミュニケーションの立場から見ると弱者となる。

② 先生への復讐心

教師には社会的な地位があるので、より反発を呼ぶ面もある。モンスターには、先生と呼ばれる人を謝らせることでストレス解消したいという気持ちがある。先生は指示や命令を下す管理者の性質を持つ職業である。教師は「気をつけ」「前に倣え」と生徒を従わせる権利を持っている。このような管理者的存在に対する否定的な記憶や潜在的な劣等感が、反発心や攻撃性へ転ずることもある。

③ 先生への幻想

先生を完全無欠な存在と規定し、その幻想から逃れられない親もいる。教師を理想的で情熱的なスーパーマンに祭り上げ、現実の教師との間にずれを感じたときにモンスターと化す。

④ 先生のスキル不足

教科を教える訓練は十分に受け、教壇に立って教える技術を持っているが、コミュニケーションの訓練は十分ではない。教員養成のプログラムは教室内のスキルを中心に行なわれ、トラブルの対処法、親との人間関係に築き方、逆境に立ったときの心の持ち方などの指導を受けていない。

4. モンスターの5タイプ

モンスターになるのは特別な人ではなく、誰でもなるおそれがある。モンスター状態になると、ある特徴を身に付ける。彼らは一見、高圧的で理不尽だが、それぞれ彼らなりに理由や背景を持っている。まず心理面から捉えると次の5タイプがある。

① 自分にまわりつく不安を抑えきれない

ほとんどのモンスターは心に不安を抱えていて、怒りや罵声は怯えの裏返しである。それらの不安に対して「大丈夫です」「ご安心下さい」と安心感を演出することが大事である。しかし共感しすぎることは禁物である。受け止めつつも受け入れない、という水際感覚を

忘れてはいけない。

② 自分の支えである大義名分を誇示し、振りかざしたい

モンスターがひたすら繰り返す言葉には、一種、もっともらしさが伴う。言葉だけを聞いていると、正義感と正当性を持った怒りのように聞こえてくることさえある。しかしよく聞いてみると、自分勝手な要求を通すために、大上段に構えた言葉で脅していることだけであることが多い。

こうした言葉に対して、正しさを争わないことが大切である。「あなたの言い分はこうですが、こちらは何々の権利があり・・・」という、油に火を注ぐことになるので、目先を変えた切り返しが必要である。

③ 自分でも把握できない怒りを放出したい

怒りたくて怒っているとしか言いようのないモンスターもいる。いっこうに話が進まず、受け止める側としても困ってしまうが、彼らは、何に対しぶつけていいのかわからない怒りのもとを体の中にいつも持っていて、放出する機会をうかがっている。モンスター自身にも把握できない怒りを他人が理解するのは至難の業である。こういう場合は、ひたすら時間をかけて話を聴く、いったん引き取ってもらう、お茶や菓子を出すなど、正論を説くよりも冷却することが効果的である。

④ 恨みを晴らし、復讐したい

権限を持った教師に対する反抗心、社会に対する不平不満を隠し持って、罵声を浴びせかける場合もある。こうした場合、自分に対する怒りではないことを心の中でしっかり認識し、話をじっくり聴いて、不平不満の背景を突き止め、その内容に十分説得力があるなら共感を示すことが、モンスターの怒りを鎮める。

⑤ 金品など代償を受け取りたい

最初から代償を受け取りたいという目的を持って、「謝るなら、誠意を示せ」とか「弁償しろ」とわめきながら襲いかかる。この要求が法律に反するまで昂進することがあるので、警察を呼ぶなどの準備もしておく。最初は金品を要求していないようなそぶりを見せたり、こちらが言い出すように誘導する場合もある野で、相手のペースに飲み込まれないことが大事である。また録音する、記録する、複数の人の証言を取るなど、不測の事態に備えて証拠を残すことが不可欠である。

以上は心理面だが、行動面からは次の5タイプがある

① 突発型

話しているうちに、怒りがこみ上げてきて爆発し、会話がまったく成り立たなくなるタイプである。自分で感情を制御できなくなると、こちらがいくら論理立てて説明したり、説得したりしようとしても効果がないので、熱が冷めるのを待つことである。

② 粘着型

執拗に接触を図り、ねちねちと同じ話を繰り返すタイプである。うっとうしいが邪険にすることは避け、対話する時間を区切ったり、仲間に対応の協力を頼んだりして、自分の仕事やペースを乱されないようにする必要がある。

③ 放出型

言いたいことを、怒りたいことをため込み、エネルギーを満タンにして充電して挑んでくるタイプである。最大パワーの状態では、対話も成り立たないので、まず相手のエネルギーを放出させ、タイミングを見計らって切り返す必要がある。

④ 循環型

怒っているときと、そうでないときが交互に現われるタイプである。常に怒っているのではなく、ふだんどおりに会話ができることがあるので、話しを理解してくれているのかなと思っているとそうではなく、怒りのモードになると、すべてを忘れてしまったかのような言動を繰り返すので、受け止める側はエネルギーを消耗してしまう。そのため、どの段階で話を打ち切るか見極めながら接する必要がある。

⑤ 無言型

黙ったまま居座り続けたり、対話の途中で困った状況になると、何も言わなくなるタイプである。あまりにも長時間にわたって居座り続ける場合は、業務に支障をきたすことにもなるので、警備員や警察など外部の力を借りることが必要であるが、まず相手が反応する言葉が何かを引き出すのが良い。

5. モンスターとの接し方

たいていモンスターは感情的になっているので、早口で高い声で怒涛のようにまくしたてる。そこでこちらは、低い声で、ゆっくり穏やかに話すことが鉄則である。さらに彼らの話を聴くときはアブソーピング、つまり相手の言葉の衝撃を吸収する特別な聞き方が必要となる。「のれんに腕押し、ぬかに釘」で、やわらかく受け止めはするが、受け容れはしないという姿勢である。

① あいづち

あいづちを打つときは「なるほど、わかりました」などと同情的な言葉を使わないことである。同意や賛成のような言葉を入れると、要求に従ってくれているのだと誤解される。頻繁に使ってよいのは「はあ」というあいづちです。「そうですね」も避け、「そうですか」と言う。あいづちのタイミングは、相手が息継ぎしたときである。どんなにまくし立てている人でも必ず息継ぎをするので、そのときに「さようでございますか」とゆっくり言う。

② うなずき

モンスターには本当は怖がり的人が多く、目をじっと見ていると威嚇されたように感じて、かみついてくることもあるから、少し視線を下げて、鼻や口の辺りを見るのが良い。相手の目ではなく、顔全体にやわらかく視線を投げかけ、ゆっくり深めにうなずいて、聴いている、という姿勢を示すことが大切である。安易に同調することも、否定することもいけない。言葉を伴わないうなずきがものを言う。

③ 繰り返し

相手の言葉を繰り返すときは、特に注意する必要がある。相手が自らの弱みや不利な材料を口にしたときに、繰り返しを行なう。また繰り返しは事実を確認するとき効果的である。

アブソーピングに加えて、モンスターには一人ではなくチームで立ち向かうのが良い。ひとりで対応するよりも気持ちに余裕が生まれ、緊張から来る震えや、うっかり失言などの失敗を防ぎことができる。一人が聴き、一人が記録をとるなどして、二人で役割を分担すればすきのない対応もでき、正確な記録も残すことができる。さらに、チームで対応すれば時間かせぎができる。「確認のために資料を取りに行く」「お茶を出して相手を落ち着かせる」など、一人が応対している間に平行して何らかの手を打つことができる。

おわりに

モンスターには特殊な人だけができるのではなく、誰でもなりうる。特にあぶないのは、モンスターに襲われた人である。モンスターから受けた屈辱、それに対する怒り、復讐心などが大爆発を起したとき、その人自身がモンスターに変身して、他の人に襲いかかる可能性がある。モンスターの増殖である。そこで子どもや自分がモンスターにならない方策を考えよう。

まず親が成熟することが大切である。成熟するとは、社会や他者と健全に関わることができることである、一人ひとりが大人の自覚を持って生きることである。

第1に自分の感情をひもとき、セルフコントロールを心がける。自分自身のことに関しても、子どもの教育に関しても、わけのわからない感情に心乱され、ヒステリックになる瞬間は誰にでも訪れる。その波にのまれないように自分の感情を抑える。それには自分の感情を言語化することである。そうすることで自分の感情を客観的に把握でき、セルフコントロールが可能になる。

第2に、事実関係を把握することである。子どもが学校で不当な目にあわされた、と聞かされたら、怒鳴り込む前に一息ついて、事実関係を冷静に把握することが大切である。子どもの話を鵜呑みにして、子どもと一緒に感情的にならないようにする。

第3に、建設的提案者の立場を常に意識する。苦言を呈さなくてはいけないときは、被害者意識に満ちた言い回しをしないようにする。責められている、と相手に感じさせると、その後の提案がどんな正当のものであってもモンスターだと思われます。無用な被害者意識や攻撃性は捨てる。

第4に、ごり押しせずに、達成可能な提案をする。提案するにはまず相手の立場に立ち、実現可能かどうかを考えることが大切である。5つも6つも実現不可能な命令を下すのではなく、前向きな提案をひとつに絞って差し出す。優先順序の高い提案から順番に差し出し、決してあせらず、無用な期待をしないことである。

第5に、相手が受け入れやすい工夫をこらす。組織で仕事をする人は、要求をのむことによって、自分の立場が悪くなったらどうしよう、という警戒心をもつから、「先生には悪い話じゃないと思います」とか「こうすると評判が良くなりますよ」などと前向きに表現し、相手の警戒心を下げ、利益に目を向けさせる。そして提案を受け入れてもらったら必ず「ご尽力いただいてありがとうございます」と感謝の言葉を述べる。

*本稿は2008年1月19日に、滑川市保育士研修会で行なった講演を元に執筆したものである。

参考文献

- 諸富祥彦、モンスターペアレント！？（2008）アспект
山崎由貴子、モンスターペアレントの正体（2008）中央法規
石川結貴、モンスターマザー（2007）光文社
本間正人、モンスター・ペアレント（2007）中経出版
小野田正利、悲鳴をあげる学校（2006）旬報社
小野田正利、親はモンスターじゃない（2008）学事出版
諏訪哲二、学校のモンスター（2007）中公新書
関根眞一、となりのクレーマー（2007）中公新書
関根眞一、ぼくが最後のクレーマー（2008）中公新書
多賀幹子、親たちの暴走（2008）朝日新書
香山リカ、キレル大人はなぜ増えた（2008）朝日新書
嶋崎政男、学校崩壊と理不尽クレーム（2008）集英社新書